

【 天国への手紙 6月17日放送原稿 】

ラジオネーム… 永遠の小僧

駄菓子屋のおばちゃん

かれこれ40年も通った、近所の駄菓子屋が店を閉めたのは、2年前。
長い間、主人として店を守ってきたおばちゃん、こと「和子さん」が
亡くなったことは、新聞のおくやみ欄で知ることとなった。

妻から「この「亡くなった和子さんて、あなたが小さいころから通った
お店の人じゃない？」と声を掛けられ、見てみると、

96歳で亡くなったそうだ。大往生だったのではないだろうか。

記憶を思い返してみると、当時住んでいた近所の駄菓子屋に

初めて足を踏み入れたのは、たしか私が4歳から5歳くらいでは

なかったろうか。見える風景はどれもキラキラしたお菓子の山と、

子供が飛びつきそうなオモチャたち。一瞬で心を奪われてからと

いつもの、毎日飽きることもなく足がく通ったことを覚えてくる。

中学生の時までは、友達とずっと店に入り浸り、学校の宿題をしたの
くらぐらに話に付き合ってもらったのだった。

大学、社会人の最初の頃までは地元を離れていて、すっかりこのお店のことを忘れてしまっていたけど、転職で地元に戻ることになり、またお店に行ってみることにした。

おばちゃんは老けていたけど、あの時と変わらない笑顔と声ですぐに自分に声を掛けてくれたときは、本当に嬉しかった。

それから頻繁に顔を出していたわけではないが、妻や子供と一緒に店に行くと、おばちゃんは、自分の昔話をバラしたりして、ちょっと恥ずかしかったなと思う。(笑)

年を取ってからは、波乱万丈だったおばちゃんの人生の苦勞話を聞かせてもらうようになり、人生の先輩として勉強になるような話ばかりだったと思う。

40年もの間、和子さんの駄菓子屋には大変お世話になりました。これからは、いっしょにゆるいお茶飲み話に花を咲かせてください。

リクエスト曲

() 人生の扉 / 竹内まりや ()